第38号

佐伯独歩会報

発行責任者
古川　敬

佐伯市チャレンジ事業　平成28年度
独歩の四季プロジェクト実施

平成二十八年度、古川会長の提案により、佐伯独歩会も佐伯市活性化チャレンジ事業に応募しようと決定し、役員でどのようなプロジェクトにするか協議して平成二十八年三月二十六日に佐伯市地域振興課に必要書類等を提出し、四月二十六日のプレゼンテーションに臨みました。

五月九日、応募団体が多く、チャレンジ収支予算書の精査があり、交付される予定だった五十万円を切る四十五万九千円の補助金が交付されることになりました。

この補助金により、年間四つのイベントと佐伯独歩会のホームページの作成に充当させることにしました。

四つのイベントは「独歩の四季」の名前の通り、それぞれの季節に一つのイベントをおこなうようにしました。

「夏は、六月二十三日の独歩忌を国木田独歩館において、「朗読と邦楽による独歩忌」を行う。**秋**は、中島礼子教授による読書会を前提とした、独歩の基本的な考え方を理解する講演会、**冬**は、Ｂ－１ブランプリに協賛して、国木田独歩館の庭で独歩が生前聞いたと思われる曲を大正琴の演奏を「琴傳流ひまわり会」によって行う。**春**は、城山周辺・黒沢地区東光庵塩釜桜の花見の遠行を行う」ように計画しました。

六月二十三日、梅雨の合間の晴れの日に、独歩の四季プロジェクト夏の部「朗読と邦楽とのコラボで偲ぶ独歩忌」が国木田独歩館において行われました。参加希望者は独歩館の広さの関係で三十名限定でしたが、次第に増えて三十八名に達するほどになりました。六時三十分開演で国木田独歩館が醸し出す雰囲気がとてもすばらしく、朗読・邦楽の効果を倍増させました。

邦楽は、「灘の揚荷唄」・「宇目の鉱石ゆり唄」・「蒲江しゃこひき唄」で、これらの民謡は独歩が生きていた時代に歌われていたものでした。これらの民謡と独歩作品『小春』『春の鳥』の佐伯の地名が出てくる親しみのある作品とマッチして参加者にあらためて佐伯に感慨を寄せてくれたように思えました。ケーブルテレビ佐伯のアナウンサーによる朗読でされたので、参加者は独歩作品の中にすぐに入りこむことができ、感銘を与えることができました。参加者にはお土産として、佐伯独歩会作成の作品集『豊後の国佐伯』を持って帰ってもらいました。これからも独歩作品に興味を持ってもらえるものと思います。

当日の様子については、六月二十六日付大分合同新聞に掲載され、「同館は、独歩が下宿した建物で、春の鳥にも登場する。参加者は当時の風景に思いをはせながら、独歩の世界に酔いしれた。」と紹介されています。

平成二十八年度　佐伯図書館感想文コンクールにて、佐伯独歩会会長賞になった宮本牧人さんに受賞したことについて寄稿してもらいました。

応募したきっかけ

宮本牧人

このたびは会長賞を賜り光栄です。「独歩と私」に応募したきっかけを二点述べます。

第一は、十一年前に私が牧師として福岡から佐伯の教会に赴任した後、当教会の草創期に佐伯滞在中の国木田独歩が深く関わっていた事実を知ったことです。建物も場所も当時とは異なり独歩関係の歴史資料は皆無でしたが、教会関係者からの伝聞および「欺かざるの記」を読んで確認し、独歩の信仰と文学に関心を抱きました。教会辞任の二年後に牧師を引退した後も妻の事情で市内に住み続けることになり、私の関心は更に深まりました。

ちなみに、近代日本文学の作家でキリスト教の影響を受けた人々は、自由尊重のためか教会の伝統には馴染めませんでした。「文学界」同人では独歩と同じく東京専門学校中退の北村透谷が非正統的・異端的だと云われ、島崎藤村は棄教者といわれました。「白樺」同人の志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎は博愛主義に惹かれますが、中でも有島は植村以上に信仰が厳密な内村鑑三に接した反動からなのか態度を変えたため、背教者の典型の如く評されてきました。独歩より数年遅れて同じく東京専門学校在学中に植村正久から受洗した正宗白鳥は、教会を一旦離れ、臨終時に植村から牧師を継いだ娘の環に信仰を告白するものの、彼も棄教者と呼ばれています。私はこのようなレッテル貼りは、教条主義的独断であり全く意味が無いと思っています。

独歩については、自らを断罪した「我が過去」や臨終時の逸話などをもとに、彼の宗教心を疑問視する論考がありますが、私は彼なりの信仰を持って生涯を終えたのだと確信しています。教会活動に熱心だから信仰が深いとは必ずしも言えないように、心に葛藤があるから不信仰だとも言えません。むしろ私は、彼の信仰が疑いや迷いを伴う人間的で現実的なものだったからこそ興味を感じたのです。

第二は、妻が初めて応募した頃は字数も副賞も現在よりスケールが大きく、それだけ書き甲斐があったそうですが、改変後の今もなお、郷土に偉大な足跡を残してくれた国木田独歩への思いを込めながら応募作品を書き続ける妻の姿を見て、自分も元・文系男子として挑戦してみようと思い立った次第です。

私の応募は今回で連続四回目となり、暫くお休みしますが、私たちのような一般からの応募者が増えることを願ってやみません。

話題になった東光庵塩釜

今年の春の遠行は、青山地区の黒沢東光庵塩釜桜を見に行きました。佐伯独歩会が実施したのは、三月十九日でした。ふだんなら三月二十日春分の日くらいには満開になっていましたが、今年は、気温が上昇せず寒い日が続いていたのか、この日にはまだ三歩咲きくらいでした。

しかし、この塩釜桜は、三〇〇年以上は経ているのか、大きな桜で花弁が白く有名なためか、ＯＡＢやＴＯＳの放送局が塩釜桜について取り上げてくれ、話題を広げてくれました。

春の遠行で訪問された方の中には、枝先の花びらが少なくなっており、樹医さんに診察してもらうことが必要ではないかと心配していただいた方もいました。

平成二十九年度佐伯市活性化チャレンジ事業「独歩の四季」に応募する。

現在の計画では、

六月二十三日　第１０９回独歩忌を豊後の国佐伯の朗読と同時代作曲家滝廉太郎の曲をフルート独奏を交えながらおこないます。

十月二十日ごろ、観光交流館において、独歩の生きていたときの音楽を演奏します。

十一月二十日ごろ、船による鹿狩りの舞台を訪ね、独歩が食した佐伯のおいしい料理を賞味します。

二月十八日ごろ、山頭火と独歩の関わりを古川会長と山頭火の会の会長とのトーク、山頭火の直筆の掛け軸の公開をおこないます。

詳しいことは、後日お知らせします。

ワカエビスカツギョ
若戎活魚センター
〒876-0801
佐伯市葛港１
TEL　0972-23-1773

独歩の四季　春の遠行
例年より開花が遅かった
塩釜桜

平成二十九年三月十九日　城山三の丸　矢野龍渓宅　国木田独歩館　東光庵の塩釜桜

春の上天気に恵まれ、楽しく遠行することができました。参加者は二十名で年齢が七十歳を超えている人が多かったので、安全に歩行するためにノルディックウォーキングの講習もかねて行いました。

いろいろな場所や碑の説明は、佐伯独歩会の副会長大野壽一氏、佐伯史談会会長佐藤巧氏が行いました。

説明した場所は、櫓門、野村越三胸像　中根貞彦氏歌碑　矢野龍渓碑　佐伯文庫　矢野龍渓宅　国木田独歩館の旧独歩碑　国木田独歩館の移築させられてきたことなどを語ってもらいました。

観光交流館よりマイクロバスに乗り、青山黒沢の東光庵の塩釜桜までいき、塩釜桜と西南戦争の際に東光庵が政府軍の司令部だったことや、国木田独歩が四月一日に東光庵を訪れ、桜花はすでに落花していたが、想像をめぐらし塩釜桜を鑑賞した黒沢地区の人たちのおもいについて「欺かざるの記」に書いていることを語ってくれました。

遠行は十時より十三時までありましたが、用意された資料によって、また説明により今までにない佐伯の歴史を理解できたことと思われます。

独歩が聞いた音演奏会

本事業は、十一月十九日（土）西日本B-1グランプリの事業に協賛して、歴史と文学を訪れる観光客・地域住民に独歩が生前耳にしたであろう音楽を大正琴演奏団体琴傳流　ひまわり会」の方々のご協力を頂き、演奏を行いました。

大正琴の生演奏は「荒城の月・みかんの花咲丘・里の秋おぼろ月夜　ふる里　あおげば尊し　もみじを演奏しました。「古城」など「荒城の月」や「あおげば尊し」などは独歩の存命中に発表された歌曲であり、独歩の耳にも届いたことと思われます。

また、午前と午後の演奏の間はＣＤにより、独歩が聞いたと思われる曲「故郷の廃家　故郷の空　旅愁　埴生の宿　思い出　蛍の光　夏は来ぬ　故郷の人々」を流しました。

国木田独歩館の庭に特別席等を用意はしませんでしたが、立ち止まって大正琴の演奏に聞き入っている人の姿が見受けられました。

大正琴は独歩の生きていた時代を髣髴とさせ、往時を感得させてくれました。あたりには明治の時代の情緒があふれた演奏会でした。

中島礼子国士舘大学教授の独歩の基本的な講演

演題　午前　「独歩の自然観・生命観について」一般対象

午後　「佐伯時代の独歩・文学の楽しさ」高校生対象

午前の部は一般を対象として、開催しました。参加人数は四十名ほどで、中島礼子教授の講演をビデオに録画するということもあり、講演は講義の形となりました。アドリブでその場の状況に対応することができなくなりましたが、講義の内容は「独歩の自然観・生命観について」ということで、独歩文学を理解していくための基本的な内容でした。

講演の内容は、独歩の自然観は、〜「自然」物や「自然」現象を個個に切り離されたかたちではなく、すべての生あるものをふくめて、「宇宙はホール」・「自然の一なること」としての現象を「ありのまゝ」の「自然」として理解していた」〜、独歩は、宇宙・自然と自己（生物＝人間的生命）ー　すなわちヒューマン　エコ・システムのなかに、真の美を認め、洞察していました。また、独歩は、社会的にさまざまに階層づけできる人びとにも、実在そのものの諸条件のもとでの視角からダイレクトに理解しようとして、社会的な差別を取りはらっている」と　語り、フランス自然主義文学のとらえる自然とは違っていることを講演されました。

参加してくださった方は独歩の文学作品に貫かれている独歩の心的な考えに触れることができ、これから読書して独歩の考えを認識していくのに大いに益になったと思われます。アンケートの回答にも、「独歩を深く理解することができた。」という感想が多く書かれていました。

午後は、高校生対象で、十五名ほどの参加でした。演題は「佐伯時代の独歩・文学の楽しさ」ということで、講演を行いました。高校生には国木田独歩という人物はあまり知られていなく、関心がないようでしたが、佐伯時代の独歩の足取りや佐伯を題材にして文学作品を創作したことを知ると、あらたに佐伯の良さを感じ取ったようであり、佐伯を誇りに思えるようになったようです。中島教授が文学をとおして、尊敬する先生のことを話され、「興味あることを続ければよい」という言葉を受け取ったことや自分が国木田独歩を研究してきて、文学作品を読むときには単に作品を読むだけでなく、その作品の時代背景などをしっかりと把握することが文学作品を深く理解することになるなどのことを話されました。先生の「文学の楽しみ」についての講演は今まで勉強してきたこととは大きく違い、これから人生を生きていくうえで大いに感銘を受けたのではないかと思われました。

質問のコーナーを設け、大学での勉強の仕方や大学時代に必要なことは友達に開かれていくことなども大いに重要だなどの話をなされ、高校生には貴重な時間になり、これからの進路の参考になったようです。アンケート結果にも、「今日の講演は大変良かった。」「国木田独歩という一人の文豪を生み出した佐伯という土地に生まれ育ったことを誇りに思いました。」などといった感想が書かれてありました。

「豊後の国佐伯」の楽譜を入手

今年の「独歩忌」のフルート独奏してくれる演奏者について高橋哲子先生と相談していましたら、混声合唱「豊後の国佐伯」の楽譜がありますよということを聞き、楽譜一部を入手することができました。表紙には「国木田独歩　『豊後の国佐伯』による合唱組曲　佐藤信武」とありました。以前佐伯市民合唱団が演奏を行ったのではないかと思われます。

文学の方面だけではなく、音楽関係の分野でも国木田独歩が多いに関わっていることを考えますと、佐伯市も文化的な活動が盛んであったと思われ、これからもしっかりと活動しなければと感じさせられました。

有限会社　ヒロ
裕
佐伯市中村北町１－１２
TEL　0972-22-2917